

流動的な外国人「集住」地域の考察に向けて ——エスニックな観光地としての側面を持つ「新大久保」の事例から——

東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員(DC1) 申 惠媛

1. 目的

日本におけるニューカマー外国人に関する研究では、その受入れに関する議論のみならず、その生活の実態を探る研究も数多くなされてきた。これらの研究では主に外国人集住地域が注目され、そこに形成されたエスニック・コミュニティが発見されたり、エスニック・ネットワークの結節点として論じられてきた。しかし、近年コリアンタウン・韓流の聖地と呼ばれ観光地化した「新大久保」は、居住・生活の場でありながら、観光地化し外部へ開かれる側面も併せ持つ独特な状況を呈している（申 2016）。本報告では、このような「新大久保」の検討から、従来の外国人集住地域研究の拡張を試みる。

2. 方法

従来の外国人集住地域研究において、各対象地域がエスニック集団との関係においてどのように記述されてきたのかに注目し、「新大久保」の事例がどのように位置づけられるか検討する。このことを通じて、観光地化という局面によって浮き彫りになった「新大久保」の事例が持つ特徴を明らかにし、本事例の検討が従来の研究にどのような示唆を与えられるのかについて考察する。

3. 結果

「新大久保」事例の検討は、次の3点において、従来の外国人集住地域研究の拡張を促すと考えられる。第一に、従来の研究では定住を前提とする同化モデルが基底となってきたという点。このような前提は、差異化を図るエスニック戦略の出現についてもいえることである。この場合、必ずしも定住しない流動的なエスニック集団が形成・関与する地域の記述方法の検討が求められる。第二に、定住を前提とするが故に、居住とそれを軸とする生活の側面に強く焦点が当てられてきた点。このために、必ずしも居住を伴わない生活の拠点となる可能性や、海外資本の介入、住民以外のアクターの関与等は扱われ難い枠組みであるといえる。第三に、このような居住への注目から描かれる地域関係者が、しばしば「定着/流動」に二極化されることで、「日本人/外国人」という二分法と強く結びついてきた点。このために、従来指摘してきたような「日本人」や「外国人」が内包する多様性のみならず、観光地化によって生じる「居住・生活者/観光客」といった構図が相対的に不可視化されてしまう傾向にある。

4. 結論

以上のように、現代日本社会におけるエスニックな観光地の出現への注目は、外国人「集住」地域という制約を問い合わせ直し、複数の流動性を抱える地域の記述を可能にすると考えられる。このことは、エスニックな商業地区を「エスニック・エンクレイヴ」ではなくテーマ型ショッピングエリアとして捉える「Chinatown 2.0」(Rath, Jan, et al. 2017) のように、移民の適応のあり方の再考を迫ると同時に、定住民中心主義への批判（西澤 1996）など、すでに日本の都市社会学で指摘してきた論点を外国人集住地域研究の地平において展開するという形で、移民研究と都市地域研究の新しい接続可能性を示唆する。

文献

- ・西澤晃彦, 1996, 「『地域』という神話——都市社会学者は何を見ないのか？」『社会学評論』47(1): 47-62.
- ・Rath, Jan, et al., 2017, "Chinatown 2.0: the difficult flowering of an ethnically themed shopping area." *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 1-18.
- ・申惠媛, 2016, 「『新大久保』の誕生——雑誌が見た地域の変容」『年報社会学論集』(29): 44-55.